

『サムイの歌』 新庄 天太

主人公の女優は、カルト教団の教員となった夫により、日々己の体を教祖に捧げることが強要されている。映画の冒頭、車で事故に遭った女優を見つめる野良犬の目は、まるで彼女の運命を見つめているようである。物語は女優が事故の治療のために向かった病院で、知り合った怪しげな男から夫を消す取引を持ちかけられたことから動き出す。男と女が出会い、二人の運命が狂わされ犯罪に手を染めることになる様式は、さながらフィルム・ノワールを思わせる。

床の粘土に滑ってしまい暗殺に失敗、撲殺も不完全で終わってしまい殺人が明らかになってしまったりする殺し屋の間抜けさや、教徒たちが教祖と女優のセックス中に別部屋で流す音楽のチープさ、そして、病気を抱えて自分で食事を取ることもままならなかった殺し屋の母親の突然の回復など、随所に見せるコミカルさもこの映画の特色の一つだろう。

暗殺が失敗、しかも完全に撲殺することなく女優の夫を放置したため逃げ出され、殺人が公になってしまい、教団に追われて別々に逃亡する女優と殺し屋。殺し屋は逃亡の過程で母親を失い、女優は整形して顔を変え、楽園のようなムードの漂う島々に身を潜める。

サムイとは、タイ王国に存在する島である。近年はリゾート地として人気を博しつつあり、青い海と大小様々な島々は、トロピカルな楽園を思わせる。子どもを迎え、恋人と暮らし、新たな人生を掴んだはずの元女優。しかし、結局は母を喪った復讐のために現れた殺し屋のせいで教団へと連れ戻され、女優として生きていくことになる。

『サムイの歌』には、二人の主人公がいた。女優と、殺し屋だ。女優は夫と教団に利用されるだけの人生を呪い、殺し屋に夫を始末することを依頼した。殺し屋は、病気の母親の薬代と生活費のために、それぞれが自分の運命を変えるために行動を起こす。だが、残酷な運命を変えることは出来ず、殺し屋は母を失い、自らも復讐のために追い詰めた女優の反撃に遭い死亡。女優もまた、殺し屋の蹴撃の影響で教団に所在を把握され、教祖の元に連れ戻されてしまう。この映画は、避けられない運命の残酷さをこれでもかという程に描いているのだ。教団に戻り、教祖の妻となって、女優業に戻った女優、鏡の中の己を見つめる彼女には激しい悲壮感を感じる。そして、ラストショットでカメラを通して我々観客を見つめる彼女の目は、気力や情熱などを感じさせず、ただもはや逃れることの出来ない己の運命を諦観している。特に女優の辿った道は、彼女個人の問題ではなく、女であることを利用され、そこから逃げ出そうとしても、結局はそこから逃れることの出来ない、そんな女性という生き物の弱く、悲しい部分を全面に押し出し、描き出されている。

緊迫感を与え、スリルを感じさせる演出力は圧巻で、映画の随所でフレームの外から急激に現れる存在によって、登場人物たちは物で殴られ、銃で撃たれ、また、銃口を突きつ

けられて脅される。そんな緊張感を映画全体を通して観客に感じさせるからこそ、終盤の、女優が撃たれるシーンが作中劇であったことを明示するシーンは、銃撃で倒れる女優、必死で闘争する恋人と子どもというカットから切り替えして撮影隊が映し出されるため、一気に緊張感から解放され、カタルシスがあり、もはやコミカルである。そして、クレーン撮影によって上方から倒れた姿を撮影される女優を見て、もはや彼女という人間が生きながらにして死んでいるように思える。

近年、フィリピン・マニラを舞台にしたケビン・デ・ラ・クルスの『壊れた心』や、ハン・ジュニの『コインロッカーの女』などで盛況を呈するアジア・ノワールに、タイの巨匠ペンエーグ・ラッタナルアーンによって、また一本の衝撃的な映画が加わったことに間違いはない。